

日本人の神木崇拜

ドクトルホルトム

西洋の詩人は森が神を拜む最初の祠殿であつたと云ふ。これは單に詩人の靈感としてよりも科學的に意味のある言葉である。古來立木を以て神そのもの又は神の家とする觀念は世界の何處にも見られる所であるが、此の二の中では、立木を其儘神と認める方が古い觀念であらう。ヘスチングスの『宗教道德百科全書』(Vol. 12, p. 448)には世界に於ける斯かる神木崇拜の多くの事例に就て書いてあるが、日本のそれに就ては書かれてゐない。そこで私は専ら日本人の神木崇拜を茲に語らうと思ふ。

日本でも、樹木は最初の神道の宮であつたと認められてゐるが、それ等の木は美的觀念の現れとして先祖の墓畔に植ゑられたのではなく、寧ろ不思議な神靈の宿る所と觀て或る樹木の崇拜が行はれ、然る後ち宮が其處へ附加へられたのだと言へる。日本の古文獻を見ても樹木が神聖視された事はよく分る。例へば、天照大神が皇孫をお降しに成る折にも、先づ天兒屋・天太玉の二神に神籬を持ち降る事を命ぜ

られてゐるし、又、天石窟へお隠れに成つた大神を招禱し奉る儀式の中心となつてゐるものも神木である。なほ更に、日本紀に依れば、神武天皇は大和の鳥見山に祭場を作つて神々を祭つてゐて成るが、河野省三博士の『神祇史概要』には、此の時にも神籬を樹て、其木に神靈を招降したのであると説明してある。斯ういふわけで、神木を立てるといふ事は、日本の上代に於て神を拜む普通の方法であつたと解したい。是等の神籬即ち神木は一時的に樹てられるもので、式典の後には直に取拂はれたが、乍併總てがさうであつたといふ證明はなく、時には神木を其儘神體として永久に祭つた例も存したらうと思ふ。斯の如く神道と神木との關係は頗る深いもので、今でも神木に神靈を降して臨時の宮居とする事は其形を遺してゐるが、是等の神木は神の名を以て代表される常磐木である。これは深い意味のある事で、常磐木は氣候に打勝ち、生命を保つ力を強く現すものだから、斯の如き常緑樹には特別の生命が宿つてゐると見るのである。そこで木の幹が二股以上にある木は、同じ意味から又、生命の二倍三倍を有するものとして、當然神木と崇められる。例へば二本杉、三本杉、五本杉等の類である。私は東北の或る田舎で二本杉が生殖器崇拜の對象に成つてゐるのを見たが、他の地方では又、之を山の神、安産の神としても祭つてゐる。次に異種の木の結合も亦神木とされてゐる。例へば春日神社のヤドリギの如きはそれで、榊・櫻・躑躅・楓・南天・藤等が接合されて一體を成してゐる如くに見える。果してそれが完全に結合さ

れてゐるか否かは疑問であるが、確に二箇所だけは、一つの根から出てゐるやうである。其外に又、其樹が古いこと、大きいこと、奇異な形をしてゐる事の爲に神木と崇められてゐる例もある。

尙次に神木の樹種については、殆ど制限がないやうである。私が見たのは松・杉・藤・桃・竹・榎・樟・銀杏・柳・椎・檜などであつた。

二

終に私は、一種特別な形をしてゐる大樹で、神木として祭られてゐるものに就て述べて置きたい。其一つは仙臺市の郊外宮城野原にある銀杏の木、他の一つは東京の板橋にある縁切榎である。

第一に仙臺の銀杏は、高さ九十七尺、周囲二十二尺、千二百年の樹齡を經たと云はれる老木で、乳母神と呼ばれてゐる。或る信仰の深い老尼が臨終の遺言に自分が死んだら塚を築いて其上に銀杏の樹を植ゑて欲しい、乳のない女に乳を授けてやると云つたので、其遺言通にすると、「其樹次第に繁茂し、年經て大なる乳房垂下れるにぞ、誰言ふとなく銀杏乳母神と言ひならはし、乳なき女の乳の出少き者又は乳房病む婦人等」が願懸けすれば、「乳出すといふ事なし」とは縁起の語る所である。此の樹の傍には、小さな繪馬堂が建つてゐるが、繪馬の圖様は何れも乳房を現してゐる。

第二の面白い實例は東京板橋の縁切榎（根株）であるが、此の神木は重に家庭内の三角關係問題に働

く外、何でも悪い事の縁切に病馬な靈験があるといふ。即ち、酒、賭博、病氣などと縁を切る方向にも神の力が働くとして説明されてゐる。原樹の古さは千七八百年だといふが判断はむづかしい。縁切榎の名はミロクといふ人が妻を伴れて来てこゝで永久の別離をして妻を返した事に基くとされてゐる。此木に宿る神靈への願懸もやはり一定の圖様の繪馬を通じて行はれる。大抵畫面には左方に榎が現してあつて、其前に願ふ人の姿を畫いたものであるが、中には木を中央に畫いたものもある。願懸者はそれに関係者の年齢、名、又切つてもらふ標的を書込むのであつて、例へば「主人四十一歳、邪齋藤美代」とある其「邪云々」といふのが手を切らせる目的の女である。又「妾三十歳位、父」といふのもある。更に又母が其子の爲に縁切を願つてゐるものもある。なほ一層風變りな例では「家屋明渡願」といふものもある。さうかと思ふと、反對に、曾て離別した夫婦の復縁願もある。

兎に角、此種の研究すべき神木は、まだ澤山日本にある事と思ふが、是等は材料がなくならない以前に研究して置くべきものであつて、古代人は重に永遠の生命の象徴として斯かる神木を崇拜したのであるが、現代人は生命の再生力又は永續力の立場から見て樹木に神靈を認めることは出来ないとしても、生命のシンボルとして之を尊重する心持は持ち得ると思ふ。私は最後に泰西詩人の句を借りて、「此の話は私如き愚者によつて作られてるが、只神のみ木を作り給ふ」といふ語を以て終りたいと思ふ。